

日本語テキストにおける感情形容詞についての一考察

——仏・英訳との比較から——

伴 映 恵 子*

A Reflexion on Affective Adjectives in Japanese Texts

—by Comparison between Originals and Their French or English Translations—

Eeko BAN*

1. はじめに

形容詞は「外在の諸現象に対する人間の反応度がかなり濃い品詞」¹⁾であるといわれるが、なかでも感情形容詞とは、「主観的な感覚・感情の表現をな」し²⁾，“話し手主体”を原則とする形容詞をいう。属性形容詞とともに日本語形容詞の一範疇を占めるこの感情形容詞は、日本語に固有であるとはいえないまでも、あらゆる言語に同様の範疇が認められるわけではない。

本稿では、日本語の文学テキストで使われる感情形容詞とその仏・英訳を比較し、主にフランス語の言語理論に依拠しながら、日本語テキストにおいて感情形容詞がどのように機能しているかという点についての考察を試みることにする。ただし、ここで二言語の翻訳を対象にするのは、それによってフランス語と英語の言語比較を行うためではなく、それらの訳法の相違がいかに原文の本質を反映するものであるかを示すためである。なお、資料としては、形容詞の使用度が高いとされる川端康成の代表作『雪国』および『千羽鶴』を用いる³⁾。

2. 感情形容詞の仏・英訳に見られる傾向と問題

まず、次の一文とその英訳に注目したい。

(1) 澄み上がって悲しいほど美しい声だつた。(『雪国』, 18頁)

(1a) It was that clear voice, so beautiful that *it was almost sad*. (p.56)

*外国語教室・非常勤講師 (Department of Foreign Languages)

『雪国』のライトモチーフとして繰り返されるこの「悲しいほど美しい声」という表現において、形容詞「悲しい」は、常に(1a)に見られるような英訳を与えられている。すなわち、《sad》(ときには《lonely》)が、必ず「声」の属性を示すものとして表現されているということである⁴⁾。これに対し、仏訳は以下のようにになっている。

(1b) la voix émouvante, si claire et si belle de timbre qu' *une sorte de tristesse vous saisissait*
(p.70)

(1b) をできるだけ直訳に近いかたちで再訳するならば、「あまりに澄み通った美しい響きであるため、ある種の悲しみが心を捕らえるほど感動的な声」ということになるだろうか。つまり、下線部《tristesse》は、ここではむしろ抽象化された感情となり、(1a)のように、「声」そのものの属性をさしているわけではないのである。類似表現においても、やはり仏訳は、原文の「悲しい」を感情表現として訳す傾向にある⁵⁾。

(1a) (1b) のように英・仏訳に差が生じる原因の所在は、直接には確かに訳者のテキスト解釈の相違にあると考えられるが、根本的にはむしろ、原文自体のあいまいさに由来するのであろう。そこで再び(1)に戻ると、すでに原文の下線部「悲しい」そのものが、感情対象である「声」の属性をさしているのか、あるいは感情主の感情表出なのかという点が、極めて不明瞭であることが分かる。このことは、感情形容詞の次のような性質に関連するものと思われる。つまり感情形容詞には、その対立的範疇で、「客観的な性質・状態」⁶⁾の表現を示す属性形容詞との境界が非常に微妙な用法も存在するということである。例えば、「寂しい景色」「つらい労働」といった場合、いずれの下線部も、それ自体の「感情性」にもかかわらず、実際には、「感情の直接的表出」ではなく、「品定め」⁷⁾的役割を担っているものと見るのが自然である。特に上の例のように、感情形容詞が体言と結びつく場合などは、そこに備わる主観性はかなり希薄になると考えられている⁸⁾。さらに、会話体においては“話し手主体”の原則を持つ感情形容詞でも、それが文学テキストのなかで用いられる際には、原則の解除が起こり、感情主のあり方に変化が生じるという問題も残る。

原文(1)の下線部は、直接に体言と結びついた表現ではないが、「声」という体言を後に伴うことによって、ニュアンスの揺れが生じている。(1a) (1b) は、原文の微妙さをそのままパラフレーズすることの不可能性を反映した訳出方法と考えられる。つまり、英訳では感情形容詞の属性に、仏訳ではその感情性に重きを置くという訳法であるが、実は各々のこうした傾向は、(1) やその類似表現に限られるものではないようである。引き続き、以下の例に注目したい。

(2) 駅長は寒い立話をさつさと切り上げたいらしくもう後ろ姿を見せながら [以下省略]
(『雪国』, 3頁)

(2a) The station master [...] turned as if to cut the *freezing* conversation short. (p.5)

(2b) L'homme, [...] s'éloignait déjà, *frigorifié* [...] (p.16)

(3) 島村は不思議な部屋のありさまを見廻した。 (『雪国』, 18頁)

(3a) Shimamura looked around the *curious* room. (p.56)

(3b) Shimamura examina *curieusement* la chambre. (p.68)

原文の下線部はいずれも感情形容詞であるが、やはり体言を伴うことによって、感情性と属性との境界があいまいになっている。英訳は名詞を修飾することで、原文の文法構造に沿い、その結果、属性を重視したものになっている。一方仏訳は、(2b) (3b) とともに、原文で連体修飾を行っていた形容詞を連用化または同格化させることにより (すなわち (2b) では《*frigorifié*》「凍えて」、(3b) では《*curieusement*》「不思議そうに」が、それぞれ主語である「シマムラ」および「男」を修飾することにより)、原文の形容詞にあたるものは直接感情主体に結びつき、本来被修飾語であるはずの感情対象語との関係は逆に緩和されている。英・仏各訳者はこのように、「属性」または「感情性」の強調という対照的な方法で翻訳に臨んでいるかに見える。その結果、構文的に見れば、英訳がより原文に忠実であるが、感情形容詞に本来備わった主体との緊密な関係を訳出せんとする試みは、むしろ仏訳に強く感じられる。

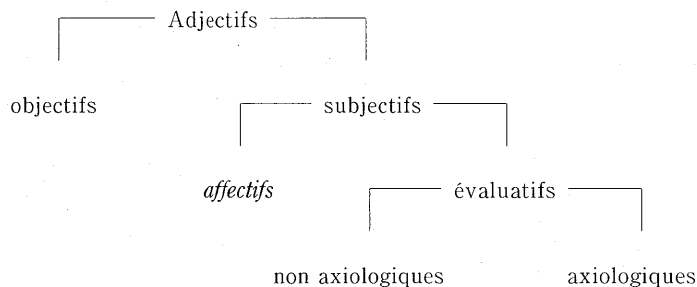
このような感情形容詞の複雑さは、文レベルにまで拡張化された解釈のなかで、二つの対照的な翻訳が相補的なかたちで明らかにしているかに見える。だが、ここで感情形容詞の“話し手主体”の原則を顧みたととき、この形容詞の持つ重層性は、少なくとも通常は、この文を支える言表状況自体への言及なしには把握不可能ではないのか、という疑問が生じる。確かに (1) (2) (3) の仏訳は、いずれも感情形容詞の本質を生かすために工夫された意識であり、英訳に比較して感情性をはるかに強く押し出している。だが実は、感情表現の客体化によって、仏訳は言表状況を締め出し、かえってこれらの形容詞の本質から遠ざかった文体を作り上げているのである。感情形容詞の持つ“話し手主体”という性質そのものは、まさに言表行為の基本であり、現代フランス語のあり方を考える上でも不可欠な要素となっているものである。仏訳に見られた共通現象は、このような事情の反映であるのか。あるいは、基本原則を失った感情形容詞を有する原文において、すでに文の客体化は起こっているのであろうか。これらの疑問に答えるため、まず次章では、言語学的見地から見た現代フランス語と言表行為との関係について考察していきたい。最初の節では、フランス語の感情表現における“話し手主体”の現象を取り上げ、感情形容詞との比較を行う。

3. 現代フランス語と言表行為

3.1. フランス語の形容詞による感情表現

J.C.Milnerによれば、日本語の感情形容詞と同様、“話し手主体”の性質を持つ感情表現は、フランス語の形容詞にも存在する。具体的に、その用法の条件とは、話し手の「情動」《affect》を「直接的な言表行為」においてのみ表し、「一般的な言葉で定義し得る過程を描写することはない」ということである。さらに、その用法のなかで使われる形容詞は、「一切の節から独立して用いられ、動詞も伴わずにそれ自体で文の価値を有する」という特徴を備えている⁹⁾。これらの形容詞は、《les Adjectifs de Qualité》(=「品性的形容詞」)と呼ばれ、例えば、《sacré Pierre!》における《sacré》や、《ce sale crétin》における《sale》などをさす¹⁰⁾。上の例に見られるように、「品性的形容詞」を含む感情表現は、感情形容詞の典型的な用法である「感情の直接的表出」におけるよりも、はるかに徹底した「直接」性・即時性を帯びているものと考えられる。しかし重要なのは、日本語の感情形容詞が形容詞のなかで重要な範疇を占めているのに対し、フランス語の形容詞では、類似の性質を備えるこれらの形容詞に特定の範疇が設けられてはいないということである。そこで実際に、フランス語の形容詞がどのように分類されているかについて考えてみたい。

Kerbrat-Orecchioniによれば、以下のような分類が考えられる¹¹⁾。



日本語形容詞と同様、ここでもまず、《objectifs/subjectifs》という二分法が採られているが、日本語の「客観(=属性)/主観(=感情)」の対立と比較して、基準の置かれ方が全く異なっていることが分かるだろう¹²⁾。なかでも注目したいのが《affectifs》(=「感情的形容詞」)であるが、その定義は、「形容詞が限定する対象の属性と同時に、その対象に対する話し手の感情的反応を表す」¹³⁾となっており、日本語の感情形容詞の定義に極めて近いといえることができる。また例えば、代表的な日本語の感情形容詞「悲しい」、「嬉しい」等の訳語に当たる《triste》、《heureux》は、明らかにこの《affectifs》の範疇に含まれると考えられる。しかし両者の決定的な相違は、日本語の感情形容詞が、その感情(または感覚)を引き起こす原因とはかわりなく、

あくまでも話し手の内面と強く結びついているのに対して、フランス語の《affectifs》は、感情（感覚）を生じさせる原因，すなわち感情対象を多く含んでいるという点である。したがってこの範疇では、感情の原因となる名詞を含む限定用法が、必然的に多数を占めることになる。例えば、《un spectacle *poignant*》，あるいは《le *petit* cadavre》（「下らない殺人事件」）などである。

ところで、先のMilnerによる「品性的形容詞」は、むしろ後者の性質のもの、すなわち感情の原因と深く関わる形容詞であると考えられる。なぜなら、彼によれば、それらの形容詞の多くが叙述用法を拒むということだからであり¹⁴⁾、また、この種の形容詞に見られる前述したような独立性は、常に被修飾語との結合によって維持されているからである。日本語の感情形容詞と相容れないこの制約には、少なくとも二つの意味が含まれるだろう。第一に、このような「直接的」形容詞は、被修飾語としての「対象」を必ず必要とするということ、第二に、フランス語の叙述用法における形容詞は、話し手の「直接的」な「感情的反応」ではなく、むしろ、話し手から離れた属性表現に近いものになってしまうということである¹⁵⁾。例えば、《sacré》を例に取ると、《sacré Pierre!》とはいえるが、叙述用法である《※Pierre est sacré.》は誤法となる。やはりこの例からも、「品性的形容詞」が、感情性の叙述ではなく、明らかに、ある対象に対して叫ばれる話し手の「感情的反応」であることが分かる。

一方、日本語の感情形容詞はどうかといえば、これは必ずしも被修飾語を必要とはしない。それどころか、前章でも触れたように、対象の存在を前提とする限定用法は、感情形容詞本来の個人的性質を希薄にし、逆に属性を強めるのが一般的な傾向であるといわれる。換言すれば、話し手の生々しい感情がより強く反映するのは、日本語ではむしろ叙述用法においてなのである。両形容詞に見られるこのような対照性は明らかに、「感情主体」と「感情対象」という二つの要因に対する両形容詞のあり方の相違を反映しているものと思われる。

フランス語形容詞の《affectifs》の定義が、日本語の感情形容詞のそれに近いということは前に述べたが、前者の定義にはさらに、「その形容詞が限定する対象の属性をも表す」という条件があった。日本語の場合とは逆に、フランス語形容詞の本質は、むしろこの後半部分にあるというべきである。この本質が、たとえ感情表現においてさえも、「感情対象」との緊密さを強める結果となるのではないか。「品性的形容詞」が例外的に“話し手主体”の性質を有するのは、形容詞そのものの問題というより語法の問題であり、すでにこのようなフランス語形容詞の本来的性質から離れ、主に名詞と前置で結びつくことによって、限りなく間投詞に近い性質に変化しているということがいえよう¹⁶⁾。換言すれば、フランス語において形容詞は、属性的性質にその本質があるということであり、なんらかの対象に対する「反応」を示さない限り、その本質に戻り易いということである。

このように、両言語の形容詞の感情表現は、“話し手主体”という特徴的な性質を共有しているにもかかわらず、それは決して、本質の近さを示すものではないことが理解できる。つまり、“話し手主体”という共通性は、そもそも形容詞のレベルにおいて認められるべきものではなく、あくまで言表行為に関わる言語的要因のひとつとして認められるべきものなのである。なぜなら、

その定義に見られるように、「品性的形容詞」は、言表行為状況に依存した解釈のみを受け入れるからであり、そのときすでに、フランス語の形容詞の本質を離れてしまっていると考えられるからである。それでは、この「言表行為」とは、フランス語文体のなかでいかなる位置を占めるものなのか。次節では、この点を追求する。

3.2. 言表行為に基づく現代フランス語文体の分類と翻訳

Benveniste は、現代フランス語における動詞の時称を、言表行為の相違によって、「歴史」および「話」という二つの体系に分類している¹⁷⁾。前者の特性は、「過去の出来事を物語る」ことであり、そこでは、話し手が、物語のなかに「全く介入することなく、ある時点に生じた事実を提示する」。一方、後者の「話」とは、「だれかがだれかに話しかけ、話し手として言表し、自分の言うことを人称の範疇において組織する場合のあらゆるジャンルを含む」ものである。このうち本稿で特に重要なのは、フランス語の物語文脈、ひいては欧文の物語文脈全体を支えていると考えられる「歴史」であるが、その特徴は、人称と動詞の時制が、「話」のそれと比較すると極めて制限されているという点に認められる。まず、人称についていえば、これは、一般に使われている意味での「人称」ではなく、著者が定義する狭い意味での「人称」すなわちコミュニケーションを成立させる要素である「わたし／あなた」《je-tu》をさす。そして、「歴史」は必ずその場の言表状況から分離されているために、これらの「人称」を始めとして、「いま」、「ここ」等、言表行為状況に関係して初めて使用され得る一切の「指呼詞」《déictic》を除去する。また、動詞の時制については、基本的には、通常「半過去」と呼ばれている「未完了過去」と、言表状況と無関係の過去の出来事を提示するのに用いられる「無限定過去」(「単純過去」)とに限定される。ただし「未完了過去」とは、「歴史」と「話」とが共有する時制であり、これら二つの時称概念が、相補的に働いていることを示している。

しかし Benveniste の功績は、言表行為を以上のように二分したことそのものよりもむしろ、それまでフランス語の動詞体系のうちで「消滅」しつつあると考えられていた「無限定過去」の位置を、「動詞の構成する形と機能の二重の体系から」明確にしたことにある¹⁸⁾。さらに注意すべき点は、「無限定過去」が、かつてと同様、テキスト中において重要な位置を占めていることを明らかにするために、著者が、「歴史」叙述のテキストのなかに、物語文の「翻訳」も含めたということである。つまり、「これ [= 翻訳] によって他の言語で書かれた物語をフランス語の適応した時称体系に移すとき、作者が自然に、どのような等価物を見つけ出すかを知ることができるからである」と彼が述べるとき、その「等価物」とは、「物語のなかに話し手が全く介入することなく、ある時点に生じた事実を提示する」という「歴史」のスタイルをさしているに他ならないのである。

ところでこのような「翻訳」の位置づけは、物語叙述の普遍的スタイルを前提としており、さらにその前提は、後に生成文法学者らの展開する物語論の基盤となるものでもある。そこで次章

においては、再び感情形容詞の問題に戻ることによって、その是非を追究してみたい。

4. 感情形容詞と言表行為との関係

4.1. 翻訳に見られる問題

ここで、日本語の感情形容詞を、3.2で取り上げたフランス語の時称体系との関連から再考察してみたい。繰り返すように、感情形容詞とは、「話し手」の関与が基本となっていることから、これがその原則通りに用いられている限りは、言表行為状況に依存する言語要素であると考えることができる。したがって、感情形容詞とはまさに、フランス語の「話」という時称体系を支える「いま」「ここ」といった「指呼詞」に含まれるべきものであり、逆に「歴史」とは相容れない要素であるといえる。ところが、感情形容詞のさらなる特殊性は、こうした話し手主体の原則が物語文体においては解除されるという点に見られる。つまり、物語文体においては、作中人物という、話し手 (=語り手) 以外の人物が感情主体になり得るということであり、同時に、感情形容詞と「歴史」との対立が消滅することになる。この例外的現象は、同じく“話し手主体”の性質を持つフランス語の「品性的形容詞」には見られないものである。

実際、前章で扱った用例は、いずれも小説の地の文に書かれたものであり、感情形容詞の本来の用法からは逸脱している。そして仏訳は、英訳と比較して、感情形容詞の本質が意識されているように見えながら、実は文全体の客体化を行っている。だが、前章でも述べたように、ここでの問題は、感情形容詞の原則が物語文体において解除されることが、果たして「指呼詞的」性格の消失をも意味するのかという点である。換言すれば、原文は完全に言表行為状況から切り離された文であるといえるかどうかという疑問である。無論、通常の三人称小説においては、感情主体である作中人物に話し手の役割が委ねられているわけではないので、純粹な意味での「指呼詞」の役割を果たしていないのは確かであろう。それでは、物語文体における感情形容詞は、「話し手主体」の本質を完全に失ってしまったといえるのであろうか。

4.2. 感情形容詞の連用用法

以下の用例は、感情形容詞が、連用化されたかたちで用いられたものを抜粋している。

- (4) さうして駒子がせつなく迫つて来れば来るほど、島村は自分が生きてゐないかのやうな呵責がつのつた。(『雪国』, 49頁)
- (5) せつなく訴へる目色は濡れかがやいてゐた。(『千羽鶴』, 76頁)

下線部「せつなく」は、文中の何を修飾していると考えるべきか。一般に、副詞を含め、連用用法では、連体用法の場合と比較して被修飾語が一定しているわけではない（後者の場合、少なくとも日本語では、修飾語の後に置かれた体言が被修飾語となることは明白である）。こうした事情は、フランス語を含めた西欧語についても同様である。

フランス語において、副詞は、いわゆる「様式の副詞」《adverbes de manière》と「様態の副詞」《modalisateur》とに区別される¹⁹⁾。前者は、《lentement》、《involontairement》等、被修飾語句が文中の一部に限定され、それを客観的に説明するものをいう。一方後者は、《peut-être》、《heureusement》等が示すように、文全体を修飾することによって、話し手の評価、判断等のニュアンスを文中に盛り込むものである。これらの副詞を含む「文」とは、抽象化されたいわゆる「文」ではなく、むしろ、具体的な発話状況を必要とするものであるため、正確にいえば「言表」である。さらに、《franchement》などは、「言表行為」そのものにかかるといえる。したがって、この「様態の副詞」とは、このような「言表」または「言表行為」との関わりから、Benveniste のいう「歴史」叙述のなかで不在とされるべき要素であることが分かる。

ここで例文（４）（５）を振り返ると、このような連用修飾の場合、文法的な被修飾領域はともかく、意味的な被修飾領域を断定することは難しい。それは、前述のように、連用修飾そのものが、連体修飾と比較して被修飾語が安定し難いということに加えて²⁰⁾、感情形容詞の本質が、言表行為状況への依存を基本としていることによるものと思われる。すなわち下線部の「せつなく」は、「迫る」「訴へる」という動作の「様式」を示すと同時に、それを知覚する視点人物の感情、さらにはそれを語る「いま」の時点における語り手の感情をも示すといった三重構造を含んでいるということである。しかもそれらは、客体化された感情を高みの視点から語るという、西欧文体に特徴的な作中人物の従属性を帯びることなく、あくまで「視点」「語り」の一体化を保っているのである。ここで、例文（４）（５）の仏訳に注目したい（各例文の後に拙訳を与える）。

- (4b) [...] plus il s'offrait aux *sollicitations* d'un continuel assaut, plus il se demandait d'où venait son propre défaut, le manquement chez lui, qui lui interdisait de vivre comme elle vivait, avec intensité et plénitude. (p.169)

[絶えず迫り来る懇願に身を任せれば任せるほど、彼は、自分自身の欠点、すなわち、彼女のように力強く生きることを自らに禁ずるそのその欠陥の出所を考えた。]

- (5b) débordant d'une *tendresse* suppliante à travers le torrent des larme, [...] (p.75-76)
[とめどなく流れる涙を通して哀願するような優しさが溢れ、[以下省略]。]

もともと「せつない」という語自体が、話し手のその場限りの個人的な心情に極度に密着しているため、正確なパラフレーズを許さない性格を持っている。したがって、これが例文のように連用化されると、そこには自ずと対象を見つめる者の感情が加味され、翻訳はいよいよ困難とな

る。ここで「せつなく」が、原語の意味から離れ、下線部に示したように「懇願」「優しさ」に対応するフランス語に換えられたのは、無理からぬ方法であったかも知れない。だが問題は、いずれの訳語も、感情性のない、動作主体本位の意味に変わり、しかも名詞化されたという点である。これは、この感情形容詞が、二重の意味で、感情主体（つまり動作を見ている視点人物たちあるいは語り手）から完全に切り離されたことを意味しよう。この例は、感情形容詞の副詞的用法が仏訳において引き起こす問題を代表していると思われるが、実際そのような用法が、副詞を用いて直訳に近いかたちで訳されている例は皆無に近いことを付け加えておく。ちなみに英訳については、(4) (5) ともに下線部が訳されていない。原文の構造と同じく連体修飾を行っていた (2a) (3a) とは、全く対照的な処理である。結果的に大きなずれを引き起こしてしまった仏訳の処理に加えて、原文の無視という大胆な処理は、下線部のニュアンスの微妙さを改めて示すものといえるであろう。以下の例もまた、感情形容詞の連用用法である。

- (6) 円覚寺の茶会の帰りに、思ひがけなく菊治が太田未亡人と北鎌倉の宿に泊まつてしまったことを、ちか子は知るはずもなささうなのに、あれから未亡人と会っているのだろうか。 (『千羽鶴』, 71頁)

- (7) 涙が目のそとに出た。しかし、それは一しづくで、左の目尻から思ひがけなく離れて、耳の近くを流れ落ちた。 (『千羽鶴』, 104頁)

- (7a) [...] a tear spilled over, drawing a *strange line* from the corner of her left eye to her ear. (p.129)

(6) (7) の下線部は、いずれも仏訳においては訳を与えられず、(6) については、英訳も施されていない。(7) は英訳 (7a) を与えられているが、下線部《strange line》の《strange》は、「思ひがけなく」という、菊治のものとも語り手のものともつかぬ感情的ニュアンスとは程遠い、全く属性的な表現である。

最後に、感覚形容詞の例を挙げておく。

- (8) こんな時菊治はつい無愛想に離れたいくなるのだが、温かく寄り添われてほんやりしてゐるのも、初めてのやうだつた。 (『千羽鶴』, 65頁)

- (8b) [...] pour la première fois, son corps aimait à sentir *la chaleur* douce de l'autre corps tendrement serré contre lui [...] (p.37)

[[中略] 初めて、彼の身体は、柔らかく抱かれたもう相手の身体の甘い温かみを感じたいと思った。]

(9) その一人の女の生きる感じが温く島村に伝はつて来た。 (『雪国』, 161頁)

(9b) et Shimamura, savourant *la chaleur* vivante de son corps, qui lui rendait sensible sa présence féminine. (p.161)

[そしてシマムラは、女 の 存在を敏感に感じさせる彼女の身体の生き生きとした温かさを味わいながら [以下省略]]

(8) (9) はいずれも文法的には、「様態」ではなく「様式」の連用形を示しながらも、実際の意味的な被修飾領域は、文法的枠組みを超えて、言表全体に拡がるように思われる。というのも、これらがある物体の属性（この場合は体温）を表す形容詞であるという決め手がない上に、テキスト内で用いられる例外的な感覚形容詞であるとしても、感覚対象、感覚主体ともに明確ではないからである。こうした不明瞭さにより、「温（か）く」という語は、いわば宙に浮いたようなかたちで、言表を支配しているのではないか。

ところが訳文では、それが抽象名詞化されることにより、「温さ」の出所も明確となり、より属性を帯びたものへ書き換えられている。すなわち、(8) (9) とともに、「温さ」はもともと女の身体にあったもの、すなわち女の「体温」として解釈され、もはやそこに感じ手の入り込む余地はない。これは、前に英訳 (1a) (2a) (3a) に見られたような、感情（この場合は感覚）形容詞の属性化をもたらしめているが、さらに抽象名詞という処理によって、原文との距離をますます大きなものにしていく。というのも、言表行為の時点で語られる内容とは、そこに居合わせることを前提とする、最も具体的な状況で意識されるはずのものであり、そのような状況を一切切り離して理解し得る抽象名詞とは完全に対極にあるからである。逆に、フランス語の物語テキストにおいて抽象名詞が好まれる大きな理由として、言表行為からの離脱という抽象名詞の性質が挙げられるのではないだろうか²¹⁾。

以上見てきたように、感情形容詞の連用化は、しばしば仏訳（および英訳）に大きなずれを起こさせるか、もしくは訳そのものを拒否する現象がしばしば見られる。このことは、感情形容詞が“話し手主体”という本来の原則を離れ、テキスト中で用いられるにしても、その本質である言表行為との関係を完全に無にするわけではないことを示しているものと考えられる。つまり、必ずしもその「指呼詞」的性格が失われるわけではないということである。

感情形容詞はこのように、物語文体のなかで文単位を超越した働きかけを行うことによって、いわば「話」と「歴史」に引かれた境界線を取り除き、独特の物語文体を作り出す。「歴史」叙述を基本とするフランスの物語文体（ひいては西欧の物語文体）が、感情形容詞の持つ言外のニュアンスを引き出そうとすれば、それは必然的に、フランス語の物語文体そのものの破壊を意味する結果となるのである。

5. おわりに

3で明らかにしたように、日本語に限らず、言語と言表行為のあり方には切り離すことのできない関係がある。4.2では、感情形容詞の連用用法を見てきたが、フランス語においても、感情を示す副詞《*involontairement*》（「いやいや」）などを三人称に対して用いることができるのは、「歴史」叙述に限られるといわれる²²⁾。これは、他者の感情内容を、話し手の言表状況に基づく「話」においては知り得ないという理由からであり、ここにはまさに、日本語の感情形容詞の原則を支える論理と同じものが息づいている。しかし、感情形容詞の場合、たとえテキスト中で用いられても、その本質は常に言表行為状況に基づいているのに対し、フランス語のこのような副詞は、反対に「歴史」叙述の指標となっている。上に挙げたような副詞は、あくまで言表行為状況とは無関係に使われる「様式」の副詞と見なされるからである。このように、同じ原理で使用されながら、そのはたらきは全く逆になるということは、とりもなおさず、物語文体のあり方自体の違いを意味するものであると考えられる。ここに再び、物語文体に対する Benveniste の一元的認識が露呈することとなるのである。

さて、これまで見てきた原文と翻訳とのずれは、翻訳文体と「歴史」叙述との間に「等価物」を見出し、原文のニュアンスをも「歴史」叙述で処理しようとした極めて基本的な「誤り」から生じたものということになる。だがこれを単なる「誤り」として斥けるとすれば、日本語の物語テキストを翻訳することの価値自体を否定することになる。だが、「等価物」説の否定は、必ずしも諸言語による物語文体が何らかの側面を共有する可能性までも否定することにはなるまい。実際、「歴史」対「話」という対立自体が、Genette に代表されるように、その後展開される物語論の土台を提供しながらも、現実の文体において、厳密なかたちでは成立し得ないといわれる²³⁾。とりわけ、伝統小説への批判から生まれた近代以降の手法は、時代を経るにつれて、Benveniste の「歴史」叙述から遠ざかる方向にある。となると、西欧語の物語文体は、時代の流れとともに、実はいつのまにか日本語の物語文体に歩み寄りつつあるのだろうか。今後の研究においては、両文体の接点に注目しつつ、このような問題を検討していきたい。

注

- 1) 寿岳章子「形容詞の語彙的変遷——中古から中世へ——」、『国語学』、第22号、1955年、61頁。
- 2) 国立国語研究所『形容詞の意味・用法の記述的研究』、秀英出版、1972年、21頁。
- 3) 以下、『雪国』および『千羽鶴』のテキストについては次の版を用い、本文中には題名と頁数のみを示す。
『川端康成集』、築摩書房、〈現代日本文学大系52〉、1972年。
なお、仏訳および英訳については、以下の版を用い、本文中にはページ数のみを示す。
Pays de neige（『雪国』）、trad. par Bunkichi FUJIMORI et Armel GUERNE, Albin Michel, 《Livres de Poche》, 1960.
Nuée d'oiseaux blancs（『千羽鶴』）、trad. par Bunkichi FUJIMORI et Armel GUERNE, Plon, 《10/18, domaine étranger》, 1960.
Snow Country, translated by Edward G. SEIDENSTICKER, Charles E. Tuttle Company, 1957.

Thousand Cranes, translated by Edward G. SEIDENSTICKER, Charles E. Tuttle Company, 1967.

- 4) 他に, 例えば *Snow Country*, p.5, p.83等。
- 5) 他に, 例えば *Pays de neige*, p.70, p.123等。
- 6) 国立国語研究所『形容詞の意味・用法の記述的研究』, 21頁。
- 7) 寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味 I』, くろしお出版, 1982, 151-154頁。
- 8) 国立国語研究所, 前掲書, 38頁。
- 9) Jean-Claude MILNER, *De la syntaxe à l'interprétation*, Seuil, 1978, p.228.
- 10) 同書, p.209。
- 11) Catherine KERBRAT-ORECCHIONI, *L'Enonciation de la subjectivité dans le langage*, Armand Colin, 1980, p.84.
- 12) 日本語形容詞における「主観」の意味が, 単に「話し手主体」をさしているのに対し, フランス語形容詞における《subjectifs》は, 相対的な判断を許す形容詞を全て含んでいる。
- 13) 以下, 同書, p.84。
- 14) Jean-Claude MILNER, 前掲書, p.208。
- 15) この点については, 例えば『雪国』中の, 「可哀相だな」(3頁), 「いやだわ」(43頁), 「悲しいわ」(33頁)といった話し手による感情形容詞の叙述表現が, いずれも仏訳のなかで訳されないか, もしくは誤訳されているという現象からも立証できるのではないか。
- 16) フランス語形容詞の位置と意味の関係については, 未だに議論の分かれるところであり, 「前置された形容詞は感情を強調するもの」という通説に対し, 例えばハラルト・ヴァインリヒは, 「後置された形容詞は識別的性格をもっているが, 前置された形容詞はかなり曖昧な意味をもち, しばしば名詞と概念的に一つの単位を形成する」(『言語とテキスト』, 脇阪豊他訳, 紀伊國屋書店, 1984年, 245-257頁参照, 下線引用者)とする。したがって, 前置された形容詞が, 必ずしも感情性を示すものではないにしろ, 感情度の濃い用法が, 下線にあるように, しばしば前置されることによって, 名詞との関係を強める可能性があることは察せられよう。
- 17) Emile BENVENISTE, *Problème de linguistique générale*, Gallimard, 1966, p.237-250 (邦訳, 217-233頁)参照。
- 18) 同書, p.243。ただし最近では, 小説における単純過去の作用は「疑似的客観性」にすぎないとしてこれを批判する声もある (Roland BARTHES, *Le degré zéro de l'écriture*, Seuil, p.26-28)。
- 19) Dominique MAINGUENEAU, *Elément de Linguistique pour le texte littéraire*, Bordas, 1990, p.37.
- 20) 事実, 連体修飾を行う感情形容詞は, その本質である感情性・感覚性が希薄になってしまうほど被修飾語への依存度が高いことは前に述べた。
- 21) フランス語テキストにおいて, 特に名詞が好まれる点については, アルベール・ドーザ『フランス語の性質』, 杉富士雄, 田辺保訳, 大修館, 1982, 355頁を参照のこと。
- 22) Dominique MAINGUENEAU, 前掲書, p.38。
- 23) Gérard Genette, Figure II, Seuil, 1969, 《Frontières du récit》(p.49-69)

参考文献

- 『川端康成集』, 筑摩書房, 〈現代日本文学大系52〉, 1972年
- KAWABATA (Yasunari) .-*Pays de neige* / traduit par Bunkichi FUJIMORI et Armel GUERNE.-Albin Michel, 1960.- (《livre de Poche》)
- KAWABATA (Yasunari) .-*Nuée d'oiseaux blancs* / traduit par Bunkichi FUJIMORI et Armel GUERNE.-Plon, 1960.- (《10/18, domaine étranger》)
- KAWABATA (Yasunari) .-*Snow Country* / translated by Edward G. SEIDENSTICKER.-Charles E. Tuttle

Company, 1957.

KAWABATA (Yasunari) .-*Thousand Cranes*, translated by Edward G. SEIDENSTICKER, Charles E. Tuttle Company, 1967.

国立国語研究所『形容詞の意味・用法の記述的研究』, 秀英出版, 1972年

寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味 I』, くろしお出版, 1982年

アルベール・ドーザ『フランス語の特質』, 杉富士雄・田辺保他共訳, 大修館 書店, 1982年

寿岳章子「形容詞の語彙の変遷——中古から中世へ——」, 『国語学』, 第22 号, 1955年

中山真彦「源氏物語の仏訳の研究——物語構造試論——(その1～その5)」, 『東京工業大学人文論叢』, 第10-14号, 1984-1988年, その1: 109-126頁, その2: 241-254頁, その3: 15-27頁, その4: 117-129頁, その5: 121-142頁

E・バンヴェニスト『一般言語学の諸問題』, 岸本通夫監訳, みすず書房, 1983年

BARTHES (Roland) .-*Le Degré zéro de l'écriture*.-Seuil, 1972.

BENVENISTE (Emile) .-*Problème de linguistique générale*.-Gallimard, 1966.

GENETTE (Gérard) .-*Figure II*.-Seuil, 1969.

(《Frontière du récit》, p.69-89)

GENETTE (Gérard) .-*Figures III*.-Seuil, 1972.

(《Discours du récit》, p.65-281) .

KERBRAT-ORECCHIONI (Catherine) .-*L'Enonciation de la subjectivité dans le langage*.-Armand Colin, 1980.

MAINGUENEAU (Dominique) .-*Eléments de linguistique pour le texte littéraire*.-Bordas, 1990.

MILNER (Jean-Claude) .-*De la syntaxe à l'interprétation*.-Seuil, 1978.